

アンビヴァレントな気配

——松島さんへ

加藤 典 洋

松島さんとは、わたしが一九八六年四月、明治学院大学国際学部に来て、ほどなく、知り合い、やがて、親しくさせていただくようになった。きっかけは詳しくはおぼえていないが、松島さんが社会学部の論叢に書かれている論文を読む機会があり、大学の先生が吉本隆明の著述を取りあげているのを見て、へえー、と驚いたのである。

取りあげられていたのは『マス・イメージ論』だったが、その取りあげ方のうちに、村上春樹の言葉でいうと、「デタッチメント」の気配のあることが、新鮮だった。いまはどうかわからないが、かつて学者が吉本隆明の著作を正面から論じるといえば、これを批判するか、あるいは、ここからの自分への影響があまり見えないように、遮断幕をおいたうえで、吉本的確な指摘に軽くふれて、これをひそかに借用、援用するか、あるいは——これが大半のありようだったが——批判するのが難しいか骨折りなので、存在だけを明記したうえで、中身は一切無視・黙殺を決め込むというのが、一般的だった。大学の外にいて、門外漢であったわたしには実際のところはわからない。けれども少なくとも社会に当時、そういう先入観が行き渡っていたのは、確かである。そうした中で、

松島さんは、『マス・イメーj論』に自分が惹かれる所以を述べた上で、各章ごとに、丁寧で綿密な検討を加え、考えを平明に語っていた。その距離感、一人の人間が一人の人間の前にたたずんでいる、といったふうで、吉本の前の平常心という言葉が似合っていた。

吉本の前の平常心。

松島さんの関心は、かくも先鋭で、繊細で、微妙なのである。おだやかな風情のまま、時代の変化の先端部分の柔毛のそよぎ、さらにそこに流れている風の気配にまで及ぼうとする。よほど過激な関心がないと、そうはならない。そういうものと、人格にまでしっかりと根をはった学問的な慎重さ、謙虚さ、実証的な手続きを行使する際の周到さが、結合している。一見すると、どの論も温容に推移しているが、よく読むなら、その論が、かなり踏み込んだところ、独創的なところまでを見据えて、しかし、論究としては「小さな」ものであろうとしている。そういうアンビヴァレントな気配を、わたしはいつも感じた。そうした特徴は、吉本の論からはじまり、沖繩研究に及び、さらに近年松島さんが関心を払っておられるらしい若い女性のマンガ、短歌といった繊細な作品群をめぐる論、ノートの書かれように、一貫して、見え隠れしている。

松島さんは、それほど有名でない、というか、ほぼ社会的には誰にも知られていないような若い書き手、マンガの書き手、短歌の書き手についてよく書かれる。そこに意味を認めているというのではなさそうだ。俵万智のようにな有名な書き手の論もあるので。しかし、このような構えの中でのこの組み合わせから、俵万智の功績はこれまで表現の網目からもれおちていた「小さくて微細な感情」を表現のスクリーンにもたらしたことにあるようにだという、感触をわれわれは受けとる。松島さんのまわりには、そういう無名の書き手のものを読んでいる学生

が集まってくるのかも知れないし、松島さんと一緒に勉強をしているとそういう触覚が伸びてきて、若い学生たちは、そちらに関心を向けるようになり、松島さんにそこで得られたものを教えるようになるのかも知れない。実際のところはわからないが、無名な書き手を松島さんが取りあげることの背後に、松島さんと学生の関係が透けて見える。ある論の末尾には、「このノートの作成にあたり、現在参加している『少女マンガ研究会（代表 野上素子）』の皆さんに感謝していることを付記する。」と書いてある。教師が若い学生、院生、元学生の集まりに参加している。そして、メンバーに日頃、感謝しているのだ。口には出さずに。論叢に載る謝辞の言葉として面白い。それだけでなく、松島さんの独自さがこういうところに、顔を見せている。

「わたしはここにリオタールがいった近代という『大きな物語』の『解体』のイメージを読みとるのである」。同じ論中に見える言葉だが、松島さんとは、わたし達が国際学部で組織していた研究会にも、お誘いして、入っていた。旅行にも一緒した。こういう「明確なこと」を口にされるとき、その顔はいつも少々照れ気味に、笑っていた。照れ気味に笑いつつ語られるのがふさわしいことが、そのように口にされたのだが、その書かれるものの中でも、この種の明瞭な輪郭が、意気込んだ風情なく、やはりいつもの口調で語られている。松島さんのご息が、一時、国際学部在籍し、わたしのゼミにいたことがある。まもなく美大に移ったが、当時、非常なマッキントッシュ・コンピュータの使い手としてゼミで目置かれていた。松島さんも絵も描かれる。大学を離れられたら、どんなふうに住事続けられるのか。ほかに例のない、「非常に若い表現者」の発掘にも似た「解体」への嗅覚に立つお仕事、この後も続くことを期待している。